

『日本の不平等』 格差社会の幻想と未来

大竹文雄 著 (大阪大学社会経済研究所教授)



日本経済新聞社
3360円

大竹文雄氏は、日本を代表する最も正統派の労働経済学者だ。大竹氏はこれまでも所得分配に関する重要な論文を多数発表してきた。格差に関する議論にも冷静なコメントを重ねてきた。

は挑発的な副題だが、決して奇異に映らない。すべて手堅い実証分析の裏づけがあるからだ。例えば、所得格差の拡大に関する幻想も、広くは高齢化がも

と大きくはなかったとする。これらの結果は、正統的な手法によって丹念に証明されたものだ。大竹氏と異なる格差観を

持った人も、その結論に納得せざるを得ないので

はないか。反論には、それを覆すた

めの実証的反証が必要となる。

あわせて本書を

そんな氏が10年以上をかけて取り組んできた所得分配研究の成果を、満

を持して世に問うた。それが、本書だ。

良質な内容はもちろん、結論も刺激的だ。「格差社会の幻想と未来」という、見方によって

◎評者 玄田有史 (東京大学社会科学研究所助教授)

不平等感、労働意欲など個人の「意識」の問題に果敢にチャレンジ

たらしめた統計のマジックによる部分が大きいという。反対に、同じく経済環境の変化として90年代に注目されたITの賃金格

差への影響は、巷間言われるほど。高く評価したいのは、正統的な実証分析に基づいている一方で、従来の労働経済の書物にな

一つは、近代経済学(近経)の流れを汲む労働経済学者が、社会調査をみずから企画、実施し、その成果を用いた研究を報告していることだ。近経の経済学者の実証研究といえば、政府もしくはシンクタンクが実施した統計調査によるデータを、ユーザーとして活用して論文にするのが、ほとんどだった。

大竹氏は、それに飽き足らず、仮説を検証すべく、自ら責任者として調査を実施した。これは労働経済学にとって一つの「事件」だ。この事件をきっかけに、労働経済学者は、データの利用者としてだけでなく、その生産者として、調査そのものに参画

する流れができてほしい。もう一つ画期的なのは、不平等感および労働意欲といった、「意識」の問題に果敢にチャレンジしていることだ。従来、多くの経済学者や一部の社会学者すら、意識の問題はあくまで個人の内面の問題であるとして、観察可能な対象だけを問題とする住み慣れた研究領域に安住してきた。

現実の労働問題は、市場の客観的現実だけでなく、個人の主観的現実にも注目しなければ、本当の解決策は見いだせない。正統で実力ある学者だからこそできる挑戦。本書の心意気、心から拍手を送りたい。